大阪府立弥生文化博物館
海に生きた人びと-漁撈・塩づくり・交流の考古学-

開催期間：平成２９年１０月　７日（土）～平成２９年１２月　３日（日）

【企画展の内容・目的】

■海洋立国、日本のルーツを探るために海を舞台に活動した海民の文化を考古学的に紹介した。日本列島各地に発達した海の文化を旧石器時代から奈良時代まで、地域的・時代的に幅広くあつかい、海とのかかわりの強さを歴史的に示した。

■最新の海のトピックを考古学・古代史などの専門家の講演会を通じて知っていただき、海への関心をより高めてもらうための「海の学びセミナー」を企画した。今に通じる海の生態や環境の大切さを知るためにきしわだ自然資料館と連携して「チリモンを探せ！」を企画した。また、展示でも大きくあつかった製塩土器の使用方法を再現する土器製塩のワークショップを行い、古代の人がどのように海の恵みを得ていたのかを知っていただいた。

■古来から続く人と海との深いかかわりを知ることで、現在の海により親しみを持っていただき、海の環境など今に通じる海の大切さを改めて気づいていただくことも目的とした。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

１．企画展示の内容

■開催期間：平成２９年１０月　７日（土）～平成２９年１２月　３日（日）

■開催場所：大阪府立弥生文化博物館　特別展示室

■入場者数：　　7,260　人

展示会では日本列島に人が住み始めた約４万年前の旧石器時代から、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代までを通史的に、海に関わる考古資料を展示していった。北海道から琉球列島まで地域的にも幅広く取り上げている。

プロローグ「海との出会い」は旧石器時代に関するコーナーで、近年世界的にも注目される世界最古の往復航海の証拠である旧石器時代の伊豆諸島・神津島産の渡海黒曜石を展示した。また、国立科学博物館、沖縄県立博物館・美術館から教示・提供を受けた最新の研究成果である、琉球列島への最初の渡海や旧石器時代の航海再現プロジェクトについても紹介することができた。日本の歴史の始まりから海と深くかかわっていることは多くの来館者に感動を与えた。

第１章「海のめぐみ」は縄文時代に関するコーナーで、日本最大の中里貝塚の貝層剥ぎ取り断面や各遺跡の精巧に製作された鹿角製漁具を展示した。東北、関東、関西、北部九州など各地の漁具の違いを知っていただくとともに、最初の製塩土器も展示することができた。世界でもまれにみる海洋適用をとげた縄文文化の豊かさや海との深いつながり、さらには縄文時代の漁業技術の高さ、塩の歴史の新たな側面も来館者におおきなインパクトを与えることができた。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

ウェブ公開用ページ　※このページは事業成果としてWEBにて公開いたします。肖像権や写真等の版権処理にご注意下さい。

第２章は弥生時代から古墳時代前期に関するコーナーで、弥生文化の発祥の地の北部九州の漁具を展示するとともに、地元大阪湾のタコ壺を多数みていただいた。関西人の好きなタコを獲るタコ壺漁の発祥の地が弥生時代の和泉にあることは新鮮な驚きであったようで、身近な海や食文化に親しみを感じていただくことができた。また、特異な海洋適用した地域として知られる北海道や三浦半島の海の文化もくわしく紹介し、多様な海の文化をビジュアルに知っていただけるようにした。

この時期から本格化する土器製塩であるが、弥生製塩の最も古い資料である吉備のものだけでなく、大阪湾岸の遺跡のものも多数展示した。強い熱を受けるためバラバラの状態で出土する製塩土器であるが、数少ない完形の資料を集めたほか、復元した模型を製作して当初の姿が理解できるようにした。

この時期より海と政治との関係がみて取れるが、これは長距離を運ばれた貝輪など権力者の装飾品や前方後円墳に副葬された鉄製漁具から具体的に物語った。

第３章「海がつなぐ」は古墳時代中期～後期に関するコーナーで、今回の展示会の大きな柱となっている塩づくりに関する土器を多数展示した。日本においては海水を土器で煮沸することによって結晶化した塩を得ていたが、貴重な完形土器を多数集めるとともに、不足するものについては復元土器を製作した。製塩土器の形と大きさは時代、地域によりかなりのバラエティーに富み、同じ目的の土器がこれだけ異なる謎に来館者は古代の海の技術の謎に興味を引き付けられていた。

また、隣接する和歌山県の西日本最大級の海の集落、西庄遺跡や海民の墓地として知られる磯間岩陰遺跡の出土品も多数みていただき、当時の海民文化の豊かさ、権力との関係についての重要な情報を知っていただいた。

墓の習俗にみられる海民の広域に及ぶ交流に関する副葬品から、当時のダイナミックな海上交流の実態についても情報を提供した。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

ウェブ公開用ページ　※このページは事業成果としてWEBにて公開いたします。肖像権や写真等の版権処理にご注意下さい。

エピローグ「海を支配する」は古代に関するコーナーで、この時期から明瞭となる国家による海、海民の支配の状況を塩に関係する木簡や製塩土器から読み解いた。また、専業的な海の集落、海民の存在もはっきりとみえてくる時期に当たるが、これも列島の政治経済との関係で考える必要があると紹介し、現在にも続く海の社会状況のルーツを探るうえで重要な観点を再認識していただくことができた。加えて、近代的な塩づくりへの発展状況を紹介するパネルも掲示し、塩の問題を考える上で必要な歴史的流れもみていただいた。

当館の専門である弥生時代だけに限らず、旧石器時代から古代まで対象を広げたこと、地域的に広くあつかったことは海民の歴史を語り、海の重要性を知っていただくうえで非常に効果的であった。各地のバラエティーに富む海の文化や海の環境の多様性をスムーズに理解していただき、今に続く海との深い関係や環境保護の大切さを再認識していただく上で有益な歴史的情報を提供することができた。

【来館者の声】

◯貝塚の層の厚さにおどろきました。又塩づくりの工夫の移り変わりがくわしく展示されているのに感心しました。

◯日本に住む人々が古くから海を恵みの場として、交流の場として接したこと。さらに海のイメージの広がり、葬区（？）の場にももちこまれたこと。農耕民といわれる日本人にも、海への想いが深くしみ込んでいるのだと思いました。

◯日本列島は、海に囲まれ、海に守られ、海の幸で長く生命を継げてきたことを、住んでいる日本人がもっと認識すべきだ、と改めて思いました。

◯今でも海外に出て活躍している人たちの元祖を感じる。特に海運！

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

２．関連事業の内容

■海の学びセミナー（全４回）

【開催日時】第１回：平成29年10月21日（土）14：00 ～ 16：00
第２回：平成29年11月3日（金祝）14：00 ～ 16：00
第３回：平成29年11月25日（土）14：00 ～ 16：00
第４回：平成29年12月　２日（土）14：00 ～ 16：00

【開催場所】大阪府立弥生文化博物館ホール

【参加者数】第１回　１３３人
第２回　１０７人
第３回　１３７人
第４回　１４９人

【実施内容・目的】

●展示会に関連して海や海民を専門領域とする研究者による講演会を行い、最新の成果を紹介した。レジュメ・パワーポイントとの映像とともに講演を聞くことによって、展示品鑑賞だけでは得ることのできない、海の重要性、文化の奥深さを理解していただいた。

●テーマの多様性に加え、当館館長との対談の時間をとり、一般の方にも論点を整理してわかりやすく理解していただいた。

第１回「古代日本の遠距離交流と文化伝播」は古代史の國學院大學名誉教授、横浜市歴史博物館館長の鈴木靖民氏による講演会であった。北海道と琉球列島に焦点が当てられ、文献史料に断片的に残る遠隔地との接触の記録が出土資料と合わせて考察され、ダイナミックな列島の交流史が復元された。具体的な土器や貝器といった考古学資料の流通を知ることにより、南北に長い日本列島で海によって地域が結びつき、クニを越えて交流が行われたことを知っていただいた。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

第２回「弥生・古墳時代の漁具について」は考古学の立命館大学名誉教授、兵庫県立考古博物館の和田晴吾氏による講演会であった。釣針・網のおもり・タコ壺などの出土漁具に焦点が当てられ、漁法の進歩と技術の拡大が明らかにされた。日本列島には各地の環境に合わせた多様な漁法・漁具が発達し、地域間で技術的な交流が行われたとの説明がなされた。こうした考古学的な側面から海民たちのネットワークや向上心に気付いていただいた。

第３回「瀬戸内海に生きた弥生・古墳時代の人びと」は考古学の愛媛大学准教授、柴田昌児氏による講演会であった。瀬戸内海の製塩土器・網の錘のおもり・船・航路の変化を、自らの航海の経験も加味して考古学から明らかにされた。瀬戸内海において海は生活の場であり、海に適応した人びとの文化が発達したことが実証的に紹介された。瀬戸内海が列島の海の動脈としても古くから重要であったことも理解していただけた。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

第４回「動物考古学からみた漁撈活動の変遷」は動物考古学の早稲田大学教育学部講師、樋泉岳二氏の講演会であった。全国の出土魚骨、貝の分析から地域的環境や時期的変化についてお話しいただいた。縄文時代より海洋に適用した人びとは社会的、政治的な動きに対応しながら海との深いかかわりを保ち続けてきた歴史が改めて浮き彫りにされた。また、日本の海の多様性や環境の豊かさについて考古学ファンも実証に基づく新たな知見を得て帰られた。

【来館者の声】

◯第１回：海の交流と交易のすごさを知り得た。海の恵みと共に全ての自然環境を大切にしなければならないと切実に思う。

◯第２回：漁労具は、現在とあまり形がかわっておらず、昔から人々は知恵を使い漁労活動をしていたのだなと感じた。また、海を介しての人々のつながりを感じることができた。

◯第３回：現代に至る海路がもとをたどれば海民の交易路に端を発するということから、海に囲まれた日本という国の発展の独自性を再考するきっかけとなった。

◯第４回：海と人の歴史からいろいろなつながりを感じました。普段は生き物が好きで観察していますが、そこに歴史や文化を重ねて考えるととても面白くなりそうで機会がありましたらまた講演会も聞いてみたいです。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

■展示解説（全４回）

【開催日時】第１回：平成 29 年 10 月 21 日（土）11：00 ～ 12：00
第２回：平成 29 年 11 月３日（金祝）11：00 ～ 12：00
第３回：平成 29 年 11 月 25 日（土）11：00 ～ 12：00
第４回：平成 29 年 12 月　２日（土）11：00 ～ 12：00

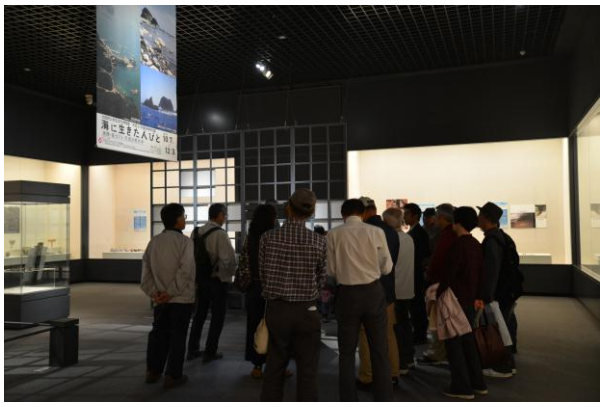
【開催場所】大阪府立弥生文化博物館特別展示室

【参加者数】第１回　２６人
第２回　２５人
第３回　４７人
第４回　３２人

【実施内容・目的】

●展示品を前にして担当学芸員が解説を行った。みただけでは理解することが難しいものもある考古資料の意義を伝えた。漁具や魚骨や貝、塩づくりの土器、交易によって遠隔地から運ばれたものなどの紹介の中に、生活の場としての海の重要性、豊かな海の環境を保護することの重要性についても注意を喚起した。

●縄文時代の資源管理、弥生時代の長距離の海上交通、古墳時代の漁法の拡大など、今日的な海の文化や環境にもつながるトピックも提供した。



来館者の反応をみながら展示物の意義を説明し、日本列島における海の歴史の中に位置づけ、海とのかかわり、海の重要性についての気付きを促した。各回ともほぼ同内容としている。

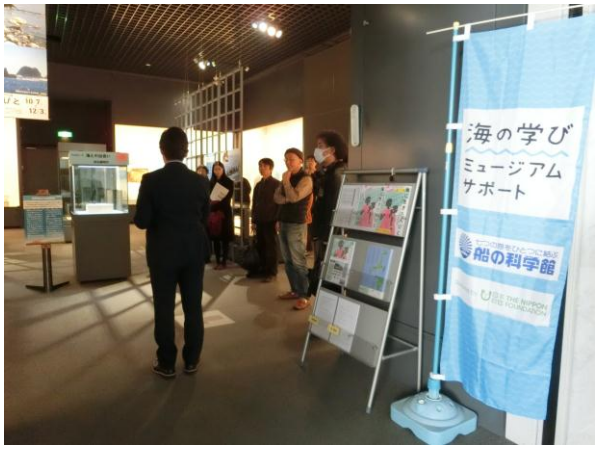
プロローグ「旧石器時代」では、伊豆諸島・神津島からの渡海黒曜石に注目が集まった。３万8000年前にさかのぼる渡海航海の証拠として世界史的にも重要な資料となっていることに驚かれていた。

第１章「縄文時代」では、日本最大級の中里貝塚の貝層の剥ぎ取り断面の迫力に加え、縄文人による自然管理の可能性に感動を覚えられていた。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

第２章「弥生時代～古墳時代前期」では、地元和泉のイイダコ壺が特に興味を引き付けた。今に続く関西人のタコ好きの起源が弥生時代にまでさかのぼることに驚かれていた。三浦半島の洞窟遺跡の出土品も関西ではなじみのないもので、列島の海の文化の多様性の魅力を知っていただけた。また、破片での展示となる製塩土器はイメージの困難なものであるが、復元土器模型があることで十分に理解していただけやすくなった。

第３章「古墳時代中期～後期」では、近隣の和歌山の海民の遺跡に注目が集まった。考古資料が示す海民の広い交流と海の可能性は、くわしい知識を持つ考古ファンにとっても新たな気付きのきっかけになったようだ。



※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

エピローグ「古代」では、国家の支配を示す木簡や製塩土器の展示から、その実態を把握していただくことができた。旧石器時代からの４万年近い長い海の歴史が古代までとぎれなくつながったことになる。

解説を聞くことによって見学だけでは伝えることのできない展示のストーリーを理解していただくことができ、より深く海の歴史の魅力に触れていただくことができた。

【来館者の声】

◯第１回：地球の７０％は海で人・動物・植物も切り放せない大切な物。自然が大切な事。これからも人類が生存する限り大切にしなければいけない。

◯第２回：人類が海の恵に支えられ、巧みに利用した古代の人々の知恵・努力・勇気等感じました。

◯第３回：海の恵みを生かし、海を往き来した我々の祖先が残したものを真近で見て、胸のあつくなる感があります。また是非解説をききながら展示をみて、歴史、祖先のことを知りたいです。

◯第４回：日本（とくに古い時代）は稲作中心のイメージが強いが、海や塩、漁業も古くから長い歩みがあることが認識できた。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

■連携ワークショップ「チリモンを探せ！」

【開催日時】平成２９年１０月１５日（日）第１回：10：00 ～ 12：00
第２回：13：00 ～ 14：30
第３回：15：00 ～ 16：30

【開催場所】大阪府立弥生文化博物館セミナー室

【参加者数】第１回　１０人
第２回　１６人
第３回　３０人

【実施内容・目的】

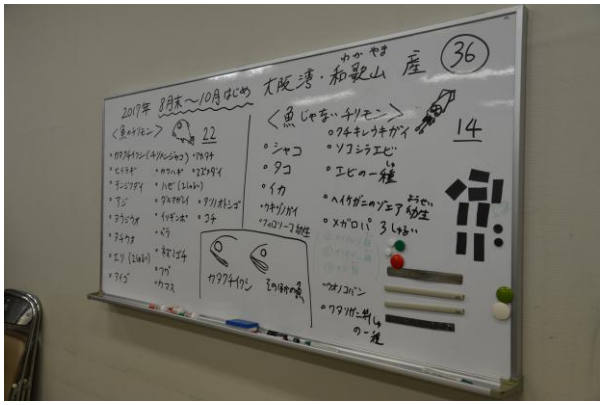
●きしわだ自然資料館の協力を受け、「チリメンジャコ」の中に含まれる、各海生生物の稚魚・幼生を探して同定するワークショップを行った。まず、自然資料館の専門家の説明、補助を受けながら観察、同定を進め、探し出したものは紙皿に貼り付け、持って帰っていただけるようにした。使用したチリメンジャコは館に近い、和歌山近海のものを用い、展示会の舞台となった大阪湾の自然環境の独自性を理解していただいた。

●単一の種（カタクチイワシ）しかいないと思っている「チリメンジャコ」には多様な海生生物が含まれていて、日本の海の生物多様性を象徴するものである。海の環境を守ることがこうした小さな生き物、さらにはプランクトンを保護し、海の多様性、豊かさを保証するものであることを説明した。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

自然資料館の専門家から手順についてのレクチャーを受け、用意した「チリメンジャコ」を観察し、カタクチイワシと異なる小さな海生生物をみつけだす。これを配付されたパンプレット、また直接指導を受けながら同定していった。最終的に紙皿に貼り付け、種名等を記載して持って帰っていただいた。

地元近海産の「チリメンジャコ」を実際観察することにより、身近な海の多様な海生生物の存在に気付いていただいた。展示で取り上げる過去の食文化は、貝塚といった遺跡から出土する魚骨・貝などから復元されるが、チリメンジャコクラスの小型の海生生物の検出は困難であり、タコやイカにかんしてはほぼ不可能で、当時の豊かな海をイメージすることは難しい。しかし、人の生活にかかわりの深い近海には小さな海生生物がおり、古来より海の恵みが人の食生活を支えていたことが本ワークショップで理解していただけたはずである。



※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

講師から海の環境を守っていかなければ、こうした小さな生き物はいなくなってしまい、日々われわれが食べる海産物も漁獲できない、という説明から、環境保護の努力の大切さを理解していただいた。

【来館者の声】

◯海には様々な生物がいること、人間と海は切っても切り離せないものであることを感じました。

◯チリモンがたくさんいるから、魚が育つ。海をキレイにする事が人にとってもとても大切だと思いました。

◯身近にあるちりめんじゃこという材料から、海を感じたり生物を考えることができてよかった。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

■ワークショップ「土器を使って海水から塩づくりをしよう」

【開催日時】平成２９年１１月１８日（土）１０：００ ～ １５：００
【開催場所】大阪府立弥生文化博物館前
【参加者数】　　３５５人（のべ）
【実施内容・目的】

●今回の展示では日本の伝統的な製塩方法である海水を土器で煮詰めて塩を得る土器製塩がテーマの一つであった。これを体感するために土器製塩の実演ワークショップを行った。作業を観察し、出来上がった塩を実際に試食することで、古代人の技術、海の恵みに改めて気付いていただく。

●塩を生み出す火の強さ、沸騰する海水、結晶化していく塩などを、安全性が確保された中、間近に観察していただけるようにバーベキューコンロを用いてコンパクトなコーナーとした。また、使用する製塩土器を手に取ってみていただいた。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

塩分を濃くした海水（鹹水）を火にかけ煮詰めることで、古代には海から人の生命に欠かすことのできない塩をどのように得ていたのかを実演した。今回は、地元和泉地域の弥生時代の製塩土器をモデルとした復元土器を専門家の指導を受けて事前に準備し、身近な海での古代人の営みを実感していただいた。

事前に使用した製塩土器を展示し、加えて塩づくりの原理、各地・各時代の製塩土器の紹介パネルも準備し、長時間立ち会わなくても古代の塩づくりの全体像が理解できるようにした。

塩とともに弥生時代の復元甕を用いた炊飯も行った。海の恵み、塩とともにコメという弥生時代を象徴する陸の恵みをいっしょに味わっていただくことで、弥生時代以降の新たな食文化を体験していただいた。稲作に注目が集まる弥生時代であるが、海も非常に重要であったことの理解にもつながった。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

館の秋の体験ワークショップの大会である「関西文化の日」の初日に設定した。これは当館だけでなく、交流のある他の博物館、文化施設からもスタッフが集まり、多彩な企画が行われる人気の行事である。例年多くの方が来館されるが、館の入り口で行ったためほとんどの方にアピールすることができた。また、実施に当たっては館スタッフ、ボランティアとともに阪南大学泉研究室の学生の協力を受けた。彼らも一般の来館者、子どもたちと接することによって大学だけではできない学びにつながったとともに、海についても知ってもらえたと思われる。

【来館者の声】

◯昔から海は私たちのとても近いところにあるものであったということ。

◯昔は海もきれいだから今よりもいい塩が出来そう。

◯海を守らないといけないといっているイミがわかった気がする。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

【事業全体のまとめ】

旧石器時代から古代まで、北海道から琉球列島までと近年まれにみるスケールでの海をテーマとした展示会となった。重要文化財を含む 600 点以上の資料で構成することができ、理解を助ける復元土器も製作した。対象を広くしたことで日本の歴史と文化を明らかにするうえで避けて通ることのできない海と海民の重要性を時代的変遷の中でスムーズに学んでいただけた。また、数多くの歴史的情報を提供したことによって、海の奥深さを再認識していただくこともできたと考える。

より深く海の研究に触れていただく機会として研究者による講演会を企画した。考古学・古代史の第一線の専門家の話は、海と生活のかかわりを示す漁具や出土魚骨や貝、船や航路、製塩土器や交易により遠隔地から運ばれたものまでに及んだ。展示資料についてさらに深く学ぶ機会として、学芸員による展示解説の機会も設けた。こうした結果、生活の場としての海の重要性、豊かな海の環境を保護することの大切さについて学んでいただく機会を提供することができた。

「チリモンを探せ」や塩づくりワークショップなど他館の協力も受け、体験のなかで海や海の環境について考える機会を作ることができた。このことにより、子どもたちも含めて幅広い年齢の方に、海の重要性・多様性をわかりやすく伝えることができ、さらには海やその環境についてより深く考えるきっかけを提供できた。

3．主な連携・協力先について

連携・協力先名称	連携・協力の内容
1．泉大津市・泉大津市教育委員会	後援　展示、広報の協力。
2．和泉市・和泉市教育委員会	後援　展示、広報の協力。
3．朝日新聞社	後援　広報の協力。
4．きしわだ自然資料館	協力　付帯事業への講師派遣。
5．沖縄県立博物館・歴史館	連携　共催した夏季特別展（当館で開催）を関連するプレ展示として位置付けた。展示協力。
6．大阪府立中央図書館	連携　図書館で９月におこなった展示会をプレ展示として位置付け、本展のアピールを行った。
7．国立科学博物館	連携　最新成果の提供を受け、展示で紹介した。

4．主な広報結果について

掲載媒体名	見出し、掲載日
1．朝日新聞	タウン、2017 年 10 月 13 日（金）
2．ニュースせんなん	平成 29 年度秋季特別展、2017 年 10 月 28 日（土）
3．朝日新聞	タコ好き 2000 年前からでっせ、2017 年 12 月 13 日（水）

以上

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。